

---

# どうしてこうなった

川崎真人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

どうしてこうなった

### 【Nコード】

N5717M

### 【作者名】

川崎真人

### 【あらすじ】

自分自身しか食さないことを金科玉条に指定しているような愚かなるぼくは、今現在、姉さんと一緒にとある建物の二階で比較的快適に暮らしている。二階といってもそれは上空数十メートルの位置にあるのだが、下にあるフロアの総数が一つだけだということを根拠にそこは二階であると言えるだろう。などという理屈はともすれば稚拙なる戯言と扱われかねないが幼稚なるぼくは真剣であった。それがするように導き出せる限りにおいてはあくまでもそういうことでしかないという低俗極まる思想に準じ、ことの責任を神様に押

し付けて、パズルのピースのようにあるべき場所であるべく生きる。  
まったく持つて如何ともしがたいその性は、文字に支配されるばかりの宿命という訳であって……

## 切断された頭部が人間とされる理由について

「問題集を買って来てくれない？」と姉さんに頼まれたのは朝食の席でのことだった。姉さんが朝早に起きてぼくの為に作ってくれたのは臓物のスープである。もっとも食材を提供したのはもちろんぼくであつて、つまり早起したのは一緒のことであつた。腹を割かれながら眠れる訳が無いのである。そしてこれは当然のことだが、臓物のスープというのは臓物が浮いたスープのことを言うのではなく、臓物を出汁に使ったスープということだ。

「かまわないよ。いったいどんな問題集を買ってくればいい？」と姉さんに尋ねてみたところ、「どんなでも構わないわ。あなたが選んできてよ。」と姉さんは答えた。「ああでも向かいの本屋さんで買っちゃだめよ、いいこと、向かいの本屋さんで買うのは絶対にだめ。」「分かったよ姉さん。」「ぼくは頷いて、「じゃあどこで買えばいい。」「と訊いた。「家を出て前に千十五歩右折して二十七歩のところに素晴らしい店があるわ。」「との指定だったので、ぼくは「姉さんそれは姉さんの足で歩いた時の話だろう？ ぼくと姉さんじゃあ足の長さからして違うじゃないか。」「と文句を言わなければならなかった。

「あたしが短足だと言いたいのそうなのそうなのね。」と姉さんは頬を膨らませたのでぼくは釈明の為に「違うよ姉さん。ぼくと姉さんじゃ体格からして違う。それにもしもぼくの右足と左足の長さが違えばコンパスのように家の前を回り続けることになるし、ぼくの足が足じゃなくて車輪だったならば家の前で永遠に立ち往生をすることになるよ。」「と述べた。賢明な姉はその説明を理解したらしく「それもそうね。」「と呟いて、それから右手の人差し指の先を派手に噛み切った。

苦悶の表情で自分の指を見つめ、それからそれをテーブルにこすり付ける。何やら計算式を用いて値を算出しているらしい。式を書

くならばくの血がボールペンを使えば良いだけの話なのだけれど、それは姉としての責任感が許さないのだろう。家からのその本屋の距離を求めることに成功した姉さんは得意げに「ここに買いに言つてちょうだい。」とぼくに言つた。そこはぼくにとても誰にとつてもあまり訪れたくない場所であつたが、姉さんに血を流させたのだからぼくとしては断るわけにはいかない。「すぐに行くよ。」と言つて甘苦い味のスープを飲み干したぼくは食後の運動も程ほどに支度を始めた。

「行つてらっしゃい。」という声に背中であえてぼくは二階から一階に移るべく階段を下つていく。踊り場に来ては体を反転させること数十回、既に何段を下つたのか概算することもできないことになった。これだけ長い階段を降りなくては外にいけないのだから、姉さんが買い物にぼくを使うのも領ける話である。

外に出た頃にはぼくはたつぷり汗をかいていた。噴出した汗はなるべく口に入れるようにしていたが、しかしそれでもつらいものがある。今朝の食事が液体だけというのはそれはそれだけで辛い話だ。せめて髪の毛の Pasta か爪のかきあげでも食べていれば話は違つたかもしれないと思い、こんなことを考えては姉さんに失礼だと自分を律する。ここでぼくがぼくでないか問題集を頼まれていなければその辺の幼女か子犬でも捕まえて解体して血肉を嚼つていたところであるが、ぼくがぼくである上に問題集を頼まれているからにはそういう訳にはいかない。いっそのことその辺の誰かにお願いして少しの間だけぼくを代わつてもらえたら良いのだけれど、絶対に断られるのは目に見えている。誰だつて自分が大切だし、それはそうであるべきことだ。

姉さんに言われたとおりの道を言われたとおりに進んでいると、ぼくは女の子に声をかけられた。女の子と言つてもそれは母親に手を引かれているのが似合うような年齢ではなく、それはすなわち彼女がぼくにとつて非常に危うくそしてとるにたらない存在だったという意味である。なので、ぼくは下を向いて身震いしながら女の子

の話に耳を傾けた。

「あなた車になってみるつもりはない？」女の子はぼくにそう問うた。なるほどぼくがどこかに向っていることを察してのその台詞らしかった。なかなか聡明であると言える。そうとも、ぼくは今自らに速さを必要としている。なるべく早く姉さんに問題集を届けたいからだ。そして車になれるのであればそれは確かに叶えられるだろう。だがぼくは身を切るような思いでそれを断った。姉さんはぼくに問題集を買ってくるように願ったのだ。車に問題集を買ってきて欲しい訳では無い。

「それは残念ね。」女の子はそれは残念そうに呟いて、それから「あなたは車輪を持っていないかしら？」とぼくに訊いてきた。ぼくは「その辺に停めてある車から失敬すれば良いじゃないか。」と勧めたが「物取りにはなりたくないわ。」などと女の子は随分なことを言った。なのでぼくは脇にあつた一台の車から車輪を七つばかり失敬すると、女の子に差し出した。「ありがとう。」女の子は礼を言つて、それからドラム缶が大量に転がった道路へと嬉しげに駆けて行く。危ないところだった。女の子がぼくに車になるように頼むような言い方をしていれば、ぼくは或いは何もかもを失ったかもしれない。それを考えると窃盗犯に成り下がってしまうことくらいどうつてことなかった。

「おい兄ちゃん。俺の車に何をする？」ぼくが車輪を盗んだ車には男が乗っていた。男と言つてもそれは体を少しも減らさないままぼくと同じくらいの大きさの分身を四つは作つていそうな年の頃であり、ぼくにとってはいわゆる目上の者であつた。失礼のないようにぼくはまず頭を深々と下げ「車輪を失敬させていただきました。」と正直に答えた。「怪しからん。もうこれでタイヤは四つしか残っていないではないか。」と男は憤慨する。「でしたら、その車を棄ててご自分が車になれば良いのです。」ぼくは女の子を手でさしてそう勧めた。男は感心したように頷いて、ぼくに礼を言つてから手のさす方へ向かつて行つた。

ぼくは男を見送ってから、今までよりもさらに急いで本屋へ走った。今のやりとりで時間を使ってしまった。早く姉さんに問題集を届けなければならぬ。幸いにして本屋はもう近くまで来ていたものだから、ぼくはすぐにそれを発見することができた。

なるほど姉さんが進めるのも頷けよう。良い店だ。ぼくは思った。なぜならその本屋の外側の壁にはその本屋で売られている書物の名前と値段がびっしりと書き綴られているからである。一度壁を完全に塗りつくしてしまえば別の色のマーカーで新たに書き足すという店主の工夫にも感服せざるを得ない。これだけの作業を怠らないだけの信念を店主は持っている。ぼくは少し背筋に冷たいものを感じて、財布の中身を確認する。どうやらここに書かれているどの本でも買えるだけの金銭を所有していることが分かると、ぼくは胸を撫で下ろした。中に入って本が買えないとなると、最悪殺されないと限らないと思ったのだ。

店に入るなり目に飛び込んで来たのは無数の自動窓口機だ。なるほど道理だと思いながらぼくは店主に声をかけた。「問題集はどこに置いてありますか?」「どういふものをお探して?」「いいえ。どういふものであっても質が良ければ買いましょう」「それは高貴だ」店主は上品な紳士であった。店のやや奥の方の棚を紹介される。素晴らしい品揃えだと言えた。ぼくはずらりと並んだ問題集の一つを手にとって、一ページずつの問題を頭の中で解いていった。一冊目が終わると次の一冊。なかなか骨の折れる作業だが姉さんの為なら仕方がない。時間もかかるがそれは形容するしかないだろう。ぼくのエゴよりも姉さんの注文の方を優先するのは当然のことなのである。

その時、何か硬質なものが砕けるような爆音が鳴り響き、ぼくの耳朶を強烈に打ち鳴らした。あわててそっちを見ると、本屋の壁が無残に破壊され、そこから幾重にもならんだドラム缶が顔を出している。縦にしたドラム缶をつなぎ合わせてまるで卵のパックのような形にしたその下にはいくつかの車輪が引っ付いていて、なるほ

どこれで走って本屋に突っ込んだのかとぼくは納得した。

「なんでいこの本屋はあ！ 壁が壊れるなんて聞いてねえぞ！」と客の男が大きな声で店主に抗議をした。店主は途端に小さくなつて「申し訳ありません私の慢心でありました。」と丁寧で心の全てを男に捧げるような切実な謝罪をする。なるほどぼくが入って来た自動ドアは自動ドアというだけで、どこにも入り口とは書かれていなかったし、壁の方にもここから進入してはなりませんと書かれていなかった。これは店主のミスでしかない。

男に怒鳴られ続ける店主にぼくは同情した。だがこんなことで時間を使つてはならないと自分を律し、問題集に目を向ける。おお、これは！ ぼくがこれからの一生を費やして世界中の問題集を漁つたとしても、これほどのものが見付かるとはとても思いがたい見事なる逸品であつた。間違いなくこれは世界一の問題集であるう。これを見付けてしまつて尚他のものに目を向けるというのは何よりも愚かなる行いであるとしか言いようが無い。まったく時間の無駄だ。ぼくはその問題集に向かつて二度三度頷いてから、さあレジを通してこれを姉さんに届けてやろうと後ろを向いた。

しかしこれはいったいどうしたことが。店主の姿がどこにも見付からないのである。なんと言う不幸なのだろう。ぼくはこの本を手にしていながらにここで立ち往生するしかない。

「店の人なら出て行つたお客を追いかけて行つたわよ。」とぼくに言つたのは覚えのある声だつた。なるほどそう言えばあの乱暴なお客がいなくなっているではないか。さては何も買わずに逃げたなとぼくはその男のことを憂い、それから女の子を向いた。

ドラム缶の隙間から這い出して来たらしいその女の子は、はたして先ほどぼくに車になることを勧めた女の子とは似て非なる外見をしていた。何が違うのかと言えばそれは髪の毛の長さ、それから服装である。着替えやらかつらやらの可能性を考慮しない限りは別人だと判ずるのが適当である。

「きみはどうしてこんなことを？」ぼくが尋ねると、女の子はや



やうんざりした表情で「妹に付き合わされたのよ。」と答えた。女の子がドラム缶の塊に向かつて「洋子お。」と呼びかけると、隙間からのそのそやって来たのはあの時の女の子であった。

「また会ったわね。さつきは車輪をどうも。お陰でこんな立派な車が作れたわ。」と先ほどの女の子は再会を喜んでくれる。「この妹が車を作るって駄々を捏ねてね。まあ監督してあげた訳」初対面の女の子が尊大な態度で言った。「きみ達、双子の姉妹なの？」「ぼくが尋ねると女の子は二人ともが首を振る。「では三つ子？」これも違うらしい。「五つ子の次女と四女よ。」

「それはなかなか、生きがたい境遇をしている。」ぼくは同情した。彼女らは五人で合わせて五つ子なのだ。ぼくにも姉がいるし、よってぼくは弟であるのだが、そんな程度の居心地の悪さなど、彼女らの抱えている軽さに比べれば、まるでとるにたらないことではないか。しかし二人は首を振って「そうではないのよ。何一つ生きがたいことなんてない。」次女の方がそう言った。

「どういうことだい？」ぼくが首をかしげると、次女の方は四女が車と称するもの的一部分となった錆びたドラム缶のうちのひとつを抱きかかえるように持って、それを力任せに引き剥がした。暴力的な音波がぼくの耳朶を虐げる。「雪姉何すんの？」どこかぞんざいな口調で四女が文句を言った。次女が足で蹴っ飛ばすと、横倒しになったドラム缶はまるで意思を持ったようにごろごろと本屋の廊下を進み始める。「これはどういうことだい？」ぼくが訊くと、突然静止したドラム缶の蓋が勝手に剥がれ落ちた。

「よう。」ぼくが車輪を？ぎ取った車に乗っていた男だった。「おまえに言われたとおり、車になってみた。」ということらしい。ぼくはなるほどと頷いて、姉妹の方を向く。「きみ達は良い姉妹だね。」ぼくが言くと、次女は肩を竦め、四女ははたと首を傾げた。

「他の三人は乗っていないのかい？」ぼくが訊くと次女が「長女がエンジンの役割を果たしてくれてる。彼女が車を蹴っ飛ばせば、こんな薄い壁を突き破るくらい速度が出る」

「楓姉、ひきこもりの癖に力はあるのよね。それに人に頼まれたら断れないから。」四女が嘲るように言った。「ふうん。そのお姉さんはエンジンで、言わば車の一部な訳だ。じゃ、このロープはそのお姉さんと繋がっていたり？」ぼくは最後尾のドラム缶から伸びた紐を手でさす。「ええ。伸びきっているところを見ると、かわいそうに引き攣られていることでしょうね。」四女はおかしそうに笑った。なるほどそれは道理だと思う。車の一部分である限り、車と繋がっている必要があるのには違いない。

「そのお姉さんとはいつか会ってみたいね」そう言って、ぼくは問題集を四女に押し付けた。「何よ？」首を傾げられ、ぼくは「今君はそれをこの店から盗んだ。だからこれは君のものだ。」「はえ？」「そしてぼくはそれを君から買おう。いくらだい？」「財布を取り出し、四女の顔を窺う。四女は「どういうことでせうか？」と首を傾げるばかり。「お金をあげるよ。五千円。」「手元にある全額である。」「本当！」四女は花が咲くように笑って、次女は怪訝そうにした。

四女から問題集を受け取って、五千円を支払う。そして次女の視線から逃げるように、ぼくは店を飛び出した。紳士として、本来ならば事情を説明してやりたいところだが、何せ今は急ぎである。後は野となれを決め込むより他はない。今度謝罪に向かわなければならぬと思いつつ、ぼくは全力で道路を走りぬけた。

家に帰り着くと、姉さんが一階に降りてぼくのことを待っていてくれた。はて何があつたのかなと思いつつ「ただいま。」の挨拶をする。「おかえりなさい。」姉さんは綺麗に笑って、ぼくから問題集を取り上げた。「これは良いものじゃない。」「言われ、ぼくは誇らしくなった。

「姉さん。」少しばかり緊張していたので、その声は上ずっていたかもしれない。姉さんは問題集のページをはがして、パズルを作るようにばらばらに引き裂きながら「何かしら？」と期待するよな声を出した。

「今のお昼はふつうのものを作ってくれないかな？」ぼくが言う  
と、姉さんは嬉しそうに「まかせなさい。」と言った。

切断された頭部が人間とされる理由について（後書き）

読了ありがとうございます。

## エンゼルフィッシュは水槽の所有権を主張できない

繁華街の只中に聳え立つ灰色一色で細長いばかりの、ともすれば新しい形の電柱とも間違われかねないような建物の最上階にして第二階層。それがぼくらの住居であった。どういうところかと言えばまず風呂がある、トイレがある、ダイニングとキッチンと寝室があるいわゆる1DK。開放的な印象を持たせる広めの空間。窓はどこにも無いが、でも通気工のお陰で換気はばっちり。姉さんの意向により一度着た服はどんどん捨てていくようにしているので、洗濯物を干す場所が無いのは問題にならない。街へ繰り出すのに地球に空洞を開けたような階段を下らなければならぬのが欠点と言えば欠点。

その日もぼくは、買い物のためにこそ階段をたったかたったか降っていた。早くも汗をかいたぼくは清涼な水を用意しておくのだったと後悔したくなる。ポケットの中にナイフの一つでも用意していれば、血でも流して飲んでおけば一応溜飲を下げることもできたというのに。色々な場面で行き当たりばったりな面が目立つのがぼくの短所である。しょうがないので犬歯で口の中に穴でも開けてやろうかと考えていると、踊り場に一人の男を発見する。

その男は全身から力を抜かれた上接着剤で床に縫い付けられており、唸ることさえできないほどに弱りきっている。彼はこの間、祖父の財産を目当てにここにやって来たところ、階段の途中で力尽き倒れたのだ。体力を根こそぎにされた彼が姉さんのおもちやにされたのは言うまでも無く、いくら泥棒とは言え、気の毒極まる話だと思う。と言って姉さんに意見をつけるつもりなどぼくには微塵たりともありえなかった。

ああ、もう三十一番目の踊り場にまで辿り着いたのか、とぼくは自分を奮い立たせた。休むのはもう少し後にしよう、せめて折り返し地点まではがんばろうかな、と思っていると「何か食い物くれな

いか？」男に声をかけられる。

「あれ。姉さんに何も貰っていないんですか？」ぼくは首を傾げた。いくらあのずばらな姉さんでも自分が管理している人間に食事をやり忘れるだなんてミスはしないはずである。二人でカブトムシを飼っていた時など虫かご一杯にゼリーを突っ込んで窒息させたことがあるほどだ。

「ああ。おまえの姉さん、上から何か投げときゃそれがここまで転がってくるものだと考えているらしくってな。少し前までなら俺が取りに行けば済む話だったんだが、今はこのとおりで。」悲しそうに男は接着剤に固定された体をよじって見せた。なるほどここに来る途中にバームクーヘンやら干からびたミミズやら落ちていたのはそういう訳だ。姉さんは少しばかり、それでは不足だと知っていて物事をサボタージユする癖がある。この男はその被害者という訳だ。「それは気の毒に。今度ぼくの方から姉に言っておきます。」さすがのぼくでも、これは姉さんを戒めなければならぬだろう。なるだけやんわりと、ともすれば一時間くらいで忘れられそうな言い方になってしまうのは力関係の都合上は仕方のないことであるけれど。

ひいひい息を吐きながらぼくは何とか下界へ辿り着いた。こんな生活が続けた所為で足腰だけは妙に鍛えられてしまっている。時間と脚力のどちらをより優先したいかと問われれば間違いない時間であるので、エスカレーターか何かを取り付けたいところであるが、そんなことをすれば先ほどのような泥棒の侵入をより許しやすくなってしまうのは問題だ。何がしかの案を検討するか或いは階段を下する練習を進める必要があるだろう。

これからするべき買い物は大学ノートとホッチキスとカタツムリを六体ばかり。余裕があれば厚めの辞典か何かを購入したいところである。ここで安易に小麦粉などを購入してはならないのがポイントである。姉さんの性格を考えればそれくらいは推し量れなければならぬところだ。

階段にかけた時間の半分ほどかかって大型のスーパーマーケットにまで辿り着いた。ホッチキスと大学ノートについては苦も無く手に入れることができたのだが、どこを探してもカタツムリが売られていない。そこらへんで店員を捕まえて尋ねてみると「当店ではカタツムリは扱っておりませんが、キャベツや白菜などに張り付いたものがいるかもしれません。」と仰った。カタツムリであるならそれで構わない。ぼくは「なら探しといてください。」と言って、手元にあるものだけを持って店の外に出る。さてどうやって時間を潰そう。店中の野菜を漁るのにどれくらいの時間がかかるのだろうか。手持ち無沙汰でスーパーの周りを歩いていた時だった。

大ぶりの眼球が落ちていた。

拾い上げるとまだ新しいことが分かった。そこら辺の電線にカラスやらが止まっているところを見ると、彼らによって目玉をついばまれた気の毒な人物がいるらしいことが推測される。これは良い時間つぶしになると判断したぼくは、そこにいるカラスの中で一際大きくて賢そうな者に群れの活動範囲を訊き出す。

言葉が通じないと言う穴をその頭の良いカラスは見事なボディランゲージで埋めて見せた。見立てたとおりの賢さである。そんじょそこいらの政治家やらと比べても十分に通用する能力の高さだ。もしもこのカラスが次の選挙で市議会議員にでも立候補したなら、ぼくは迷わず一票を投じることだろう。もつともぼくは選挙権という奴を持つていないので、それは適わぬ話であるのだが。

教えられたとおりの道を行く。なるほど先ほどのカラスの下っ端らしき連中が忙しそうに飛び回っている。自分たちの道のりを逆に進むぼくを怪訝そうに見ながらも、彼らは殊更何も仕掛けては来なかった。人間であるというだけで彼らカラスにしてみれば、ぼくのような青二才ですら大きな恐怖なのだろう。そのあたりの肝の大きさの違いが有象無象と先ほどのカラスとの格の差を表していると言える。

「お兄ちゃん、この子をどう思う？」そうぼくに訊いたのは年端

もいかない少女達であつた。「何のことだい？」勤めて優しげにそう答えたばかりに、少女達がまるで連行するように連れてきたのは、下を向いて縮こまっている為に周囲の同世代と比べても小さく見える女の子。

話を訊くところによると、彼女は体育のプールの時間において、目を開けて水の中に入ることができないのだそうだ。瞳が水を浴びるのが怖いようなのだが、なるほどそれならば目玉を摘出してしまえば何でもないじゃないかと思いついたらしい。そこまでならなかなか賢明だと言える話だが、取り出した目玉をプールサイドに置いてしまったのだから大変だ。案の定、両方をカラスに持っていていかれて困っていると言う話。

「それでどうして、君たちはその子をとがめるように言うんだい？」などと訊いてみたところによると、視力が無いという状況に耐えられなくなつたその子は、持っていたタオルに描かれた猫のキャラクターの瞳を切り取って自分の目の中に入れてしまったらしい。なるほどそれは確かに、自分勝手な話かもしれない。少なくとも、自分の為に他者から略奪することを良しとしない小さな少女たちにとっては、その子の行いは絶対悪という他無いに違いない。

「あまり責めないであげようよ。」言つて、ぼくは女の子に眼球を一つ手渡してやる。女の子は布でできた目玉をくりくりさせてこちらを見て、ありがとうと言つた風にこくこく頷いた。布の目玉を引きずり出して無造作に地面に棄て、代わりに元の目玉を瞳へ突っ込む。不器用なのかその女の子はもたついてばかりいた。「グズねえ。」

「違うみたいだよ。」ぼくは言う。「どうやらこの目玉はこの子には少し大きいようだ。」

そんなあ、と力なく女の子は言う。周囲の子達は嬉しそうにしていたが、その心境と言えは悪は悪であつて欲しいし、救われて欲しくないという正義感であろう。心の成長がうまくいつている証拠であり、良い兆候であると言える。もっとも、他人の子供がどんな風



に育とうが知ったことではないし、ぼく自身まだまだ成熟している  
とはいいたいから、こんな風に言うのはいささか傲慢という  
奴であろう。

だが、何れにせよここまで関わってしまったているからには、絶る  
ようにこちらに向くこの女の子を見捨てる訳には行かないだろう。  
ぼくは「ちよつと待っててね。」とそれだけ言って、スーパーの入  
り口に走る。「今は何匹カタツムリが見付かっていますか？」と適  
当な店員に尋ねる。「三匹ですが。」「じゃあ一匹で良いので今く  
ださい。」「カタツムリの代償として十円玉を三津手放したぼくは、  
すぐに女の子のところに向かった。

「そのカタツムリをどうするの？」と気味悪そうに訊くのは目玉  
がちゃんと二つある女の子だ。ぼくは飛び出た目玉を強く引つ張つ  
て十センチほどに伸ばし、それから引き抜いて見せると、予想がつ  
いていた通りに、皆が仰け反って見せる。ぼくは視力をなくした  
女の子の顔の空洞に、カタツムリの目をそれぞれ突き立てた。

「見えるかい？」女の子に尋ねる。こんなのだようとあごの辺  
りまで垂れ下がった細長い目で女の子は涙を流した。周りのまとも  
な目をした女の子たちはどつと笑う。ぼくはその用済みになったカ  
タツムリを地面に棄てた。女の子の一人が、即座にそれを踏み潰し  
た。

女の子達に別れを告げて、スーパーに戻った頃にはカタツムリは  
六匹目が見付かっていた。先程踏み潰されたのをあわせての話であ  
る。手間賃含めて千三百五十円を支払い、カタツムリを受け取って  
家に帰る。ひたすらに長い階段を上る過程で、床に接着剤で貼り付  
けにされた男と再び顔をあわせた。

「何か、飯を買ってきてくれたのか。」と男は的外れなことを言  
う。「いいえ。あなたの世話をぼくがやると、姉さんが機嫌を損ね  
るんですよ。」とぼくは勤めて申し訳なさそうにそう言って、「食  
事なら、もうすぐに手に入るでしょう。それまでは、自分の口の中  
の肉でも食べれば良いのです。」「アドバイスをしてあげた。男が何

か言っていたが、階段を上りつかれて至極疲労したぼくにはこれ以上聞こえない。

「ただいま。帰ったよ姉さん。」ぼくがそう言っで現れると、「おかえり。」呟いた姉さんは手のひらの上で小ぶりの眼球を二つ、弄んでいる。「ねえ、あなたこれ食べる？」ぼくは首を横に降った。「そう。」姉さんは階段に向かって二つの眼球を投擲、ぼくが何か言う前に「言ったものは買ってきてくれた？」と訊かれたので、ぼくはスーパーの袋を姉さんに手渡す。姉さんありがとうと笑って、ぼくは幸せになった。

エンゼルフィッシュは水槽の所有権を主張できない（後書き）

読了ありがとうございます。

## 鏡の使い方を知りながら人が自殺を行なわない訳

蝉が鳴くのは雌をおびき寄せる目的であると、そのような事実をぼくがはじめて知ったのはつい四日前のことである。成長に成長を重ねその結果ついに五百メートルの全台を突破した我が家の二階に止まっていた蝉を見て『姉さんこんなところにまで蝉が飛んできているよ。随分とど根性な奴だね』と言ったばかりに『飛んでくるなんてそんなことはありえないじゃない。三年前くらいからそこに張り付いていたんじゃない？ それならまだしも有り得るわ。蝉の寿命は七年だから』と姉さんは言った。蝉の寿命は確かに七年くらいだけれどそれはものを食べた場合に限るということを姉さんに伝えると、顔を赤くした姉さんは名誉挽回とばかりに自分の知りうる限りの蝉の知識を披露してくれた。さすがはもの知りの姉さんであり、ぼくはすっかり勉強をさせてもらった訳だ。

姉さんの曰く、蝉が鳴く理由と言うのは小学生くらいの人間ならば誰でも知っていることなのだそうだ。そう言われても、あの茶色くて握りつぶすとばりばりという音のする生き物について物好きでもなんでもないぼくは昔から興味など持っていなかったし、別だん恥と感ずることはなかった。

ぼくは下界の公園のベンチにて何もせずじっと座っていた。どうして何もせずじっと座っていたのかと言えばじっと座っていたかったという簡単明瞭な理由に基づく。今は姉さんに何も言われていないし、姉さんがいる訳でもないので家にいる理由もほとんどない。ならば五百メートルの階段を降りるのにどれくらいの労力が必要なのかを調べる目的で下に降りて来たという訳だ。

気紛れを起こした太陽が十月に蝉を生かしていた為に、秋の公園は涼やかなみんみんという音に満ちている。休憩にはちょうど良い、風情に満ちた公園である。

「こんにちは」と何者かに声をかけられて、ぼくはそちらに振り

向いた。はたしてそこにいたのは右腕のない女の子であり、その顔の造詣には見覚えが合った。「少し待ってください」ぼくは自分の頭蓋骨に指で穴を開けて海馬のあたりを穿り回す。しかし何も出てこず、それどころか物理的な刺激によって混乱した脳はあらぬ幻覚をぼくに見させた。無数の鉛筆削りが公園を乱舞しながらホツチキスを求めて一生懸命に叫んでいる。おまえはいつたいホツチキスを何をどうするつもりなんだとぼくは突っ込みたくなったが、鉛筆削りが幻覚でしかないことを思い出して自粛する。

「何をやっているんですか？」心底驚いた声を発して女の子は左側しかない手をぼくの肩に触れた。何をそんなに驚くことがあるのだろうと一瞬考えて、ぼくは自分の過ちに気付いた。海馬とは重要な記憶とそうでない記憶を別ける機関であってそこに思い出が詰まっている訳では決してない。「いいや。失礼、見苦しいものを見せたね」とぼくは一言謝っておいて、それから女の子に向き直る。「以前お会いしたことがあったのでは？」

女の子は信じられないような顔をして「成美が右腕を切り落としたのですか？」とそんなことを言った。ぼくは首を横に振って「いや。ぼくの知り合いにナルミという人物はいないし、腕の切り落とされた人間は君を含めて六人しか知らないが、その内の五人は左腕を落としている」とそう答えた。女の子は「じゃあ、楓姉か、雪姉か、洋子に会った？」三つの名前を頭の中でこね回す。すぐに思い出した。「ああ。それならこの間、車のエンジンとハンドルと運転手にそれぞれ成っていたのを見たよ。君はあの子らの姉妹なんだね」ぼくが言うと、女の子ははにかんで「三女の聖です」と物腰柔らかに自己紹介をする。

「聖ちゃんか。それで、五女が成美ちゃんと言うわけ？」ぼくが尋ねると「はい。いつも誰か姉に化けているものだから、彼女と成美として話をするのはできませんけれど」と聖ちゃんは答える。

なるほど聖ちゃんはその為に右腕を切り落としている訳なのか。妹が自分に化けられないように工夫をしたのに違いない。なかなか

根性のある良い子である。ぼくは感心させられて、つい笑顔になった。この子とは仲良くしたいな、とそう思う。

「聖ちゃん。蝉は良いと思わないかい？」ぼくは言った。「そうですね？ うるさいと思いますよ」そういう聖ちゃんに、ぼくは格好をつけて「風情があるじゃないか。この声。異性を求めて必死で声を出している健気さを感じていると、とてもよく和む」言った。すると、聖ちゃんはおかしそうに「じゃあ。蝉を捕まえてみてくさい」とそうぼくに求めた。

「どういうことだい？」ぼくが訊く。「蝉の声をわずらわしく思わず、蝉の健気さをいとおしいと思うのは、あなたが蝉を自分よりも下劣な存在だと思っているからです。だって、自分以上の存在の自己主張を心地良いと感じるのは、おかしいでしょう？ ふつうなら、この鳴き声を心地良いとは思いませんよ、音自体が好きなのなら、ともかく」

なるほど。なかなかラジカルなことを言ってくれる。ぼくは感心して、それからベンチを立ち上がった。「ようし。それじゃあ、これから蝉を捕まえて見せよう」聖ちゃんは困ったように笑って「冗談です。何も、捕まえることはないじゃないですか」と、前言を撤回する。なるほど捕まえられる蝉を不憫に思ったのだろう。

「いいや。ぼくはこの蝉の声を、ずっと心地良いと感じていたいんだ」これはなんとしても譲れないことであった。だから、何としても蝉を捕まえてみせる。言うなり、ぼくは木に登って、蝉に手を伸ばす。

蝉は大きく二枚の羽を広げて、その間から緑色の光線を発射した。それを食らったぼくの視界は黄色と黒色を混ぜたような色彩に染まり、四肢はしびれて動けなくなった。そのまま木にしがみ付いていることができず、勢い良く地面に落下する。背中をした戦う地つけた。酷く痛い。

「大丈夫ですか？」聖ちゃんが心配そうにこちらに駆け寄った。「負けてしまったよ、聖ちゃん」なさけなく、ぼくは呟く。「ああ

ちくしょう。蝉の野郎め。何と不愉快な鳴き声なんだ」

ぼくは誓った。いつか、この世の蝉と言う蝉を殺し、この不愉快な音色を世界から撲滅してみせると。皆がこの声を不愉快に思っているはずだ。ならば、僕はその行いによって英雄と認められるだろう。そうすれば、我が家だって五百メートルといわず、一千メートルでも、一万メートルでも目指すことができるはずだ。

「やってやる。蝉を皆殺しにしてやる」ぼくは誓いを口にした。その相手は聖ちゃんしかなかった。彼女は困ったようにぼくに笑いかけると、「ははは。楓姉も喜ぶと思いますよ、そうしてくれたら」とそう言った。

「楓姉？ 確か長女だったかな」ぼくは首を傾げつつ、どうにかその場を起き上がった。体についた土を払うのが面倒だったので、その場で上着を脱ぎ捨ててしまう。ズボンを四枚重ねて着ていたことが幸を喫したと言えよう。上下一枚ずつ脱ぎ捨てて尚常識的な格好でいるぼくに、聖ちゃんは呆れたような表情を見せて、「さすが、洋子の知りあいだけありますね」と笑った。

「洋子ちゃんは四女だったかな。ところで、長女の楓ちゃんがどうしたんだい？」ぼくが訊くと、聖ちゃんは表情を固くして「相談があるんです」と言った。

「あの子は以前からずっと引きこもっていて、家から出ようとしません。理由について尋ねても、いつも違ったことばかり言って。本人は外に出たがっているのですけれど」なるほど。その彼女をぼくにどうにかして欲しいと言うことか。「でも。この間は楓ちゃん、車のエンジンとして活躍していたよ」ぼくが言くと、聖ちゃんは「それは成美だったのかもしれないし、そうじゃないにしても、雪姉に無理矢理連れ出されたんだと思います」寂しそうな口調だった。「お願いします。私の家、変な人が多いから誰も寄り付かなくて。頼れる人がいないんです」そこで、僅かながらに姉妹と関わりのあるぼくを頼ってくれた訳だ。ぼくは笑顔で「もちろんだよ」とそう答えた。なぜなら、そうするしか、なかったからである。

明かりが灯ったように笑顔になる聖ちゃん。ぼくは今すぐにでも楓ちゃんのところを迎える旨を伝える。「分かりました」そう言つて、彼女はぼくの手を引いて歩き始めた。即席で車を作ることも、木によじ登つてその木が楓ちゃんに向かつて生長するように促すことも、鳥を捕まえて運ばせることもしない、堅実な移動方法は、聖ちゃんの性格をあらわしていると言えた。

さて、楓ちゃんはどんな子なんだろう。実に楽しみだった。



鏡の使い方をしながら人が自殺を行わない訳（後書き）

読了ありがとうございます。

過半数の胎児は母の胎内しか愛せない（前書き）

アクセスありがとうございます。

## 過半数の胎児は母の胎内しか愛せない

どこかに行きたいということはすなわちそれはそこにいたくないことを表しているのだと、その昔姉さんから聞かされたことがある。言われてみるとなるほどその通りかもしれないとそのように考え、一抹の疑いを口に出すこともせずに姉さんの言うことならと飲み込んでいた。

しかしここであえてならばといえば、ここにもどこにもいたくないという人間ははたしてどのようにしていれば良いのだろうと、そのような問題になるのではないか。これは極めて稀なケースには間違いないし、他でもない姉さんの言い分に対しそのような考えを抱くのはぼくという人間にはあつてならないことである。そりゃあもう絶対にだ。

だからこそ、身を持ってそのような引きこもりの少女に出くわす羽目になり、ぼくは相当に楽しみだった。

楓ちゃんはある自分の家があまり好きな訳ではないだろう。仮にそうだとすれば外に出たいという意思を彼女が持っていることが不自然になるからだ。それはもう、絶対にそういうことなのである。つまりところ、ぼくのすべきことは簡単なのだ。楓ちゃんを相手に家に引きこもることはとても良くないと、そのように言いざとすことである。

「家に着きましたよ。」聖ちゃんに言われてぼくは意識を自分の外側へと移した。「これは良い家だ。」言いつつぼくは四つの黒い円の上に立つ赤い外装の丈夫な家をぺしぺし叩くのだけれど、聖ちゃんは連れない様子で「それは車です。」とそう言った。なるほどこれはどちらかと言えば車のような外見をしているとぼくはそのように思ったのだけれど、しかし聖ちゃんの体により近い方を彼女の家とするのも一つの道理だと、そのように言えるのではないだろうか。そもそも玄関と屋根があり人の入れる空間のことを家と呼ぶな

い道理は無いのだし。

「すると、こちらの白い建物の中にいるのが楓ちゃんかい？　そうは見えないけれど。」「それは犬小屋です。中に置いてあるのは漢字辞典ですけれど。」聖ちゃんは呆れたように言う。「ほう。漢字辞典に小屋を与えているのかい。なかなか博愛的じゃあないのかい。ぼくの姉さんなんか、人間を飼っているんだが、木工ボンドで全身を床に縫い付けるばかりなんだよ。困ったもので、そろそろ体も緑色になって来たし、そろそろ悲鳴をあげながら爆発を起こす時期なんじゃないのかと、ぼくはするように心配しているのだ。どう思う？」

「それはお姉さんに良く抗議するべきでしょう。」片方しかない手で頭を抑えながら聖ちゃん。「それはそうと。私の家はこっち。この青い屋根です。」「この青い屋根の建物の、どこなんだ？」「ぼくが尋ねると、聖ちゃんは首を振って「全てです。」とどのように言った。ふむなるほど。そりゃあそうだ。

玄関を招かれて、ぼくはその広さに圧倒される。「ほう。玄関と言うのはこれほどまでに立派なものだったのか。これなら体を横にずらしながら家に入る必要が無いどころか、ここに布団を敷いて眠ることもできるじゃないか。」家のことを褒めたというのに、聖ちゃんはどこか歪な笑みを浮かべて「そうですか。」とそのように笑うだけだった。ぼくは喜び勇んで靴を脱ぎ、揃える。聖ちゃんはぼくの手を取って歩き出した。

「それじゃあお邪魔するよ。」うきうきとぼくが言った。「床に気をつけてください。誰か釘でもばら撒いていないとも限りません。」忠告するように聖ちゃん。「何。釘程度なら、足にささったところでのつぽになれて良いことだよ。本当に怖いのは色鉛筆とかだ。」「そうですか」聖ちゃんはあしらうに言う。「……あいたつ。」言うなり、悲痛な声をあげた彼女は片目を閉じて床の方を見る。何か、灰色いものを踏みつけてしまったようだった。

「ハツカネズミかい？」ぼくが尋ねると、聖ちゃんは「これはそ

のように利口な生き物ではありません。おそらくは、兄が作ったおもちやでしょう。」「言いながら足をどけると、そこには真正正銘のハツカネズミが赤い体液を晒して潰れてしまっていた。」「ほう。これがおもちやだというのか。」「ぼくは感心する。」「良くできていますね。まるで本物のハツカネズミのようだ。」「これは多分、本物のハツカネズミを捕まえてきて作ったんだと思います。多分、尻尾についた糸がどこかに繋がっていることでしょう。そこで兄が遊んでいる。」「聖ちゃんは小さく笑って「気にせずに行きましょう。さあ。姉の部屋ですよ。」「壊れたおもちゃが赤い痕跡を残しながら糸で引かれて行った。

さあ。これから楓ちゃんをご対面という訳である。」「それでは。私は待っています。」「という聖ちゃんに力強く頷いたぼくは、ときどきしながら部屋の扉に手をかけた。主の意思を反映するかのように扉は重く、というかいくらか力をかけても開かないところを見るに鍵がかかっているようだった。

「こまりましたね。」「というのは聖ちゃん。」「どうしましょうか？　そこから何か話しても、姉のこと。部屋の奥でイヤホンをつけてうずくまってしまうはずですよ。」「困り果てた様子の彼女に、ぼくは胸をどんと叩いてから言った。」「ねえ聖ちゃん。彼女に扉の鍵が開いていることを伝えてくれないか？　そうすれば彼女は鍵の点検の為に部屋の前まで来るはずだし、上手く行けば間違えて鍵を開けてくれるかも。」「

聖ちゃんは残念そうに「いいえ。姉は部屋の前に誰がいる時、何かをしようとしませんのです。」「「そういうものかい？」「ええ。そういうものです。どうやら、物音を聞かれるのを怖がるようですよ。」「なるほどそれは良く分かる。部屋の中でとどまる彼女にとって、時間とは速く過ぎるほど良いものに違いが無い。ならば、じつと何もしていないことに何の呵責もないのだろう。」「それは残念だ。」「ということは、ぼくは楓ちゃんが出てくるまでここで待ち続けなくっちゃいけないことになる。」「

聖ちゃんが驚いたように言った。「まさか。姉は勘の良いところがあります。部屋の前に人がいることを悟ったら、飢えて死ぬまで出てこないことに違いありませんし、或いはどうにかしてあなたを殺そうと試みる可能性さえあります。」「その点は心配しないでくれ。」「ぼくは胸を張った。「死んだようにしていることならすぐく得意なんだ。体の中で常に動いていなくちゃいけない部分以外、全部停止させるくらいの特技はある。君だって、やろうと思えばできるだろう?」「聖ちゃんは首を振った。ぼくはそれに何も答えずに、楓ちゃんの部屋の前で待ち続けることに決める。

引きこもりというものの、対面である。とてつもなく楽しそうではないか。ぼくは噂に聞いたものなら何でも実際に見てみたがる性質の持ち主で、ひきこもりについては、姉さんにご教授いただきたいことがある。

彼女の世界が如何なるものなのか、それを知る為にぼくはここでじっと待ち続けるのだった。はたして、この扉が腐り落ちるのと、ぼくの寿命が尽きるのと、どちらが早いことだろうか。わくわくするものさえ感じながら、ぼくは待ち続ける。空気の温度が下がるのを感じ始めた頃、ぼくの背後から声がかかった。「あなた。モグラになるつもりはない?」

「やあ。君は誰だったかな?」ぼくは背後の人物にそのように声をかけた。聖ちゃんよりは髪が長くて、背中を途中まで覆っている。「私は雪子です。ところで、あなたモグラになるつもりはない?」

いい加減、太陽の光を浴びるのにも飽きたでしょう? 表面が数千度の熱の塊に焦がされながら、四本ある足の内の二本しか使わないで毎日歩き回るなんて、バカげていると思わない?」「それはそうかもしれないね。」「ぼくはそう言っただけだ。」「ぼくはこうも思っただ。太陽の明るさも、二本の足を地面につけないでいることも、バカらしいと思っただのは、これまでそうしていたからなんだ。バカらしいと思うほど、ずっとそうしていたからなんだ。だからぼくは、これからずっとそうしてられるはずなんだ。あえ

てモグラになる必要なんてないよ。」

「そう。」雪子ちゃんはそう言つて「そのこと。洋子にも伝えてくるね。あの子にはそれがつようだと思つから。」颯爽と背を向けてその場を去つて行く。彼女に楓ちゃんを部屋から出す方法を尋ねようかと思つたけれど、彼女を部屋から出さなくては行けないのはぼくなのだし、彼女にそれを伝えてしまうのは違うことである。

再び空気の温度が高くなるのを感じるころ、ようやく部屋の扉が開いた。雪子ちゃんらと同じ顔をしたパジャマの少女は、髪の毛を裸足の足元まで垂らしていた。「何？」少女は端的にそれだけ訊くなのでぼくは「人間だよ。」とそうように答えて、「君の名前を聞かせて欲しい。」とそうように言つた。「楓。」やはり帰つて来たその返答。扉を閉めようとする彼女の腕を無理に引つ張つて妨害し、ぼくは部屋の中に滑り込んだ。

力付くで外に出さなかつたのは、一時的な解決では聖ちゃんが満足しないことを知つていたからである。接着剤と木の丸太が奥に詰まれて、他にはベッドとテレビと本棚があるだけの部屋だった。普段はテレビから発される光と音を体内に取り入れながら、木の丸太をそのナイフでばらばらにして、それを接着剤で元の形に戻しながら暮らしているのかもしれない。随分と賢い子である。

「何？」と楓ちゃんは訊くので、ぼくは今度は「歩いたんだ。今いる地点に。」とそうように答えて、その場に腰掛ける。「さあ。ぼくの目的は、君に定期的に部屋を出るようにしまってもらいたいという君の妹の望みを適えることだ。その為には、君に協力してもらわなくっちゃいけない。」

「……はあ。」楓ちゃんは首を傾げる。どこかしら眠たそうで、足元で落着かなく自分の髪の毛を弄っている。「それはできません。」偉く端的に答える彼女にぼくは「そういう訳にはいかない。」とそうように言つた。しばし、見詰め合う羽目になる。

さて、こういう事態が一番厄介なのである。複数ある事態が互いを否定しあう時、状況は停滞しあうしかない。妥協と言う行為は

もつとも下劣であると姉さんに教わった。ぼくは、折り合いをつけるということ忘れてこう言った。「君は協力できない。ぼくは君に部屋から出てもらわなければならない。なので、ぼくは自分だけの力で君を部屋から出すことになる。」

「この部屋をどうするつもりですか？」聖ちゃんのいうとおり、勘の良い女の子だった。楓ちゃんはぼくの考えていることがすぐに分かったらしい。「そりゃあ。君だってこの部屋が他と比べて良いところだからずっとここにいるんだ。ここが居心地の悪いところになれば出て行くのがふつうだろう？ 少なくとも洋子ちゃんならそうする。」そう言つて、ぼくは気付いた。

楓ちゃんにとってここが良いところだとは限らない。それでも、彼女は長いことここにいた訳だし、それはつまり、彼女はこれからここにいられるということだ。それをわざわざ外に出す必要なんて、少なくとも楓ちゃんには何も無い。

「それは困ります。」楓ちゃんは言った。「そうさせない為に、私は何でもします。」言いながら、傍にある丸太を手にとって、ナイフで削ることを始める。何を言っても聴こえそうもない集中の具合で、実際に「何の為にその行為をするんだい？」と聞いても何も答えなかった。ぼくはそれを見ることにした。悪い時間ではなかったし、彼女に対して何かをするなら、彼女が何かをしてからが正しい順序である。部屋を住み心地の悪い状態にする作業ならば、それはまずは楓ちゃんの動きを止めてからで、その為には、彼女がナイフを手放すのを待つ必要があった。

三時間ほど彼女がそうしているのを見詰めていた。ぼくに、尖らせた丸太を楓ちゃんが突きつけて来る。ナイフよりは木の杭が好きで、そちらを作っていたのだらう。よほどその凶器を愛していると言える。

「出て行ってください。」楓ちゃんは言った。ぼくはテレビを持ち上げると、楓ちゃんの捨てたナイフでそれを削り始める。どちらかと言えば木でできた杭よりテレビでできた杭の方が強いだろうと



感じた結果である。ぼくがその作業を始めてすぐ、彼女はぼくの背中を杭で突いて、それからぼくのナイフを取り上げて来た。

「何をするんだい。」出血する背中を見ながら、怖がるように楓ちゃんが返事をする。「テレビに何をしますか。」「削っていたんだよ。」「ぼくは立ち上がって言う「君こそ、少しの間出て行ってもらいたい。」「楓ちゃんが怯えたようにするのが見える。なるほどぼくはナイフを持っている。これでは女の子を怖がらせているだけだ。なので、ぼくはすぐにそれを捨てた。あわてて楓ちゃんがそれを拾い上げる。」

「……あなた。外の人ですか。」「そうだね。この部屋を外とするなら、ぼくがいるところは内ではなく外になる。」「一度目を大きく開いた楓ちゃんは、一人何かに納得してから「そうですか。じゃあお願いがあります。これは、私が部屋を出る為に必要なことです。」「などと神妙に口にする。」

「何だい?」「ぼくは毅然と言った。何を言われても実行する心積りである。」「私は水が嫌いだから、水のある外には出たくありません。だから、それを何とかしてくれたら外に出られます」「了解した。」「言うなり、ぼくは外に出る。」「どうでした?」「という聖ちゃんに会う。」「水が必要だ。」「ぼくは言った。」「ホースで水を出す。頼むよ。」「聖ちゃんはすぐにその用意をしてくれた。ぼくは楓ちゃんの部屋に戻る。案の定。鍵が閉まっていた。」

「水はどうにかなりましたか?」「それがどうにかならないと、外には出ませんよ。」「楓ちゃんの声だった。」「いつもこうです。無理難題を言って、外に出ようとしません。」「聖ちゃんが肩を竦める。」「ああ。これから君の嫌いな水をどうかしよう。だから扉を開けてくれ。」「本当ですか?」「目を輝かせて出てきた彼女の顔に、ホースで水をぶちまける。」

「いいかい。水とはこういうものだ。何か対策が浮かばないか、一緒に考えようじゃないか。」「やめてください。」「苦しうに、楓ちゃんは言った。」「冷たいです。」「聖ちゃんに申しつけ、放水を

やめてもらう。

「どうだった？」ぼくはそう言った。「あながち耐えられたんじゃないかな？ 他に苦手なものがあつたら、一緒に解決して行こう。そうすれば、この部屋以外のところだって、少しは好きになれるんじゃないのかい？ そういうやり方なら、良いだろう。」

長い髪に水を滴らせながら、ずぶぬれの楓ちゃんは神妙に頷いた。「分かりました。」なるほどそれは、なかなか肝の据わった返事だった。思うに、水の冷たさが、あながちそうそう耐え難いほどでもなかったのだろう。

そこ以外のところを少しでも知れば、今まで遠ざけていたものを少しでも知れば、今いるところの嫌なところを少しでも見出すものだ。多分、部屋の中にとくと、体が塗れる心地良さも感じなかったのかも知れない。

そういうことも知らなかったに違いない。だいたいのモグラが、日光の暖かさを知らないのと同じである。

過半数の胎児は母の胎内しか愛せない（後書き）

読了ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5717m/>

---

どうしてこうなった

2011年10月7日07時39分発行